

## 第5回アレキサンダー・ベイン賞 授賞報告

## The Report of the Fifth Ceremony of Alexander Bain Award

ベイン賞選定委員会

Alexander Bain Award Committee

『アレキサンダー・ベイン賞』は今から8年前に画像電子学会に創設された本学会で最も権威のある表彰である。その創設の経緯については本学会誌通巻 225 号 (Vol.42, No.4, pp.509~511) の報告記事をご参照いただきたい。

本年度は西田友是名誉会員並びに小宮一三名誉会員を第5回の受賞者として選出し、令和3年6月25日の年次大会で表彰式を実施した。今年はいまだコロナパンデミックが終息せず、年次大会の主要行事がリモートで開催される中、アレキサンダー・ベイン賞の授賞式は荒川区のサンパールの会場に関係者を集めて挙行され、受賞者を祝福した。

受賞者の功績内容(サイテーション)は西田氏が『コンピュータグラフィックス分野の創設ならびに学会運営への先導的貢献』であり、小宮氏が『画像入力技術の先駆的研究および学会運営活動への献身的貢献』である。

表1と表2に両氏のご略歴の抜粋を掲げる。表彰式はまず田中清会長の開会挨拶のあと、小野文孝選定委員から選定理由並びに受賞者の功績内容の紹介が行われた。続いて会長より両受賞者に表彰状とベイン・メダルが手渡された。引き続き西田、小宮両氏から受賞のご挨拶を頂戴した。その要旨を次頁に掲げる。

最後に松本充司名誉会員の閉会の挨拶があり受賞者を囲んでの記念撮影で締めくくられた。本記事の最後に当日の写真のいくつかを掲げ授賞報告とする。

なお、これまでのアレキサンダー・ベイン賞の受賞者(8名)は、いずれもファクシミリに関連の深い方々であったが、本表彰の対象は画像電子学会の分野における貢献であり必ずしもファクシミリに限定されていない。今回VC分野の西田先生が受賞されたことにより、これが明確化されると共にIE(Image Electronics)とVC(Visual Computing)の学会内でのコラボレーションが一層進展することを楽しみにしたい。また、締めくくりに松本名誉会員から、メダルのデザインに関し、英国サイエンスミュージアムからアレキサンダー・ベインの肖像モデルの使用ライセンスを得ていることが紹介された。この話に対し、西田先生より、2次元のモデル画像をメダルにするとときに3次元化した処理に関して質問があり、さすがはCGの専門家でいらっしやると会場が大いに沸いた。

表1 西田友是氏ご略歴

1973年	広島大学工学研究科修士 マツダ入社
1979年	福山大学電子電気工学科講師
1988年	米国 Brigham Young 大学客員研究員
1990年	福山大学教授
1998年 10月	東京大学 大学院理学系研究科情報科学 専攻 教授
1999年 4月	東京大学 新領域創成科学研究科複雑理 工学専攻 教授 (2013年3月定年退職)
2013年 4月	広島修道大学経済科学部教授 UEI リサーチ研究所所長
現在 東京大学名誉教授, 広島修道大学名誉教授, デジタルハリウッド大学卓越教授, プロメテック CG リサーチ所長. 画像電子学会ビジュアルコンピューティング研究会委員長(2001), 情報処理学会 GCAD 研究会主査, 画像電子学会会長, IEEE Transactions on Visualization and Computer Graphics 編集委員. 情報処理学会 山下記念研究賞, 米国 ACM SIGGRAPH Steven A. Coons Award (2005), NICOGRAPH CG-Japan Award (2006), 紫綬褒章(2017), 情報処理学会船井業績賞(2020)受賞. 平成18年画像電子学会「西田賞」創設.	

表2 小宮一三氏ご略歴

1971年3月	早稲田大学理工学研究科修士課程修了
1971年4月	日本電信電話公社通信研究所入所. 以来 ファクシミリ端末, 画像入出力マルチメ ディアシステムの研究実用化に従事
1993年4月	神奈川工科大学電気工学科教授
2003年4月	同情報学部情報ネットワーク工学科教授
2005年4月	神奈川工科大学副学長, 情報学部長
2010年4月	神奈川工科大学学長, 現在に至る
1991年	小林正次技術賞「密着型イメージセンサの開 発」受賞, 1995-1999年編集委員長, 2008年 画像電子 学会会長, 2010年 次世代画像入力研究会設立, 2013 年 画像電子学会フェロー, バーチャルファクシミリ 博物館委員長, 工学博士.

## 受賞者ご挨拶

西田 友是氏



### ご挨拶要旨

私は学部生（広島大）だった 1970 年に CG 研究を始めました。当時カラーモニタはまだ日本になく、大学に 1 台しかない計算機を利用していました。図形の出力装置は XY プロッターしかなく、研究環境はいいとは言えませんでした。こうした中、周囲からは「貴重な計算機で絵を描くとは何事だ」と非難を受けました。卒研として隠線消去問題に取り組み、当時の学生としては珍しく、論文が情報処理学会誌に採択されました。今思うとこれが研究者へのきっかけだったといえます。大学院では共同利用の計算機を利用するため、九州大、名古屋大、東京大によく出張しました。フォートラン言語でパンチカードを用いてプログラムを入力する時代でしたので、1 万枚程度のカードをリュックサックに背負い夜行列車で出張していました。この頃はプログラミングとは肉体労働と理解していました。卒業後は車会社に 6 年勤務した後大学に戻りました。今振り返ると結局半世紀に亘り CG 研究に携わることになりました。CG 分野では権威のある国際会議 SIGGRAPH での発表数が多かったので、突然東大から電話があり、東大で CG の講義をすることになり研究環境も充実しました。画像電子学会には CG 分野を取り入れたいとのことで恩師の中前教授とともに入会しました。以来 VC 委員会の委員長や会長職を拝命し学会とお付き合いが続いています。受賞といえば ACM SIGGRAPH から 2005 年にクーンズ賞を頂き、これがきっかけで、本学会に「西田賞」が設立され、CG 関連の優秀な論文を書いた人に授与されています。この賞を通じ若き研究者の育成に貢献できて喜んでおります。この度、CG 研究者には縁がないと思っていましたファクシミリ創始者の名を冠した賞を頂き、これを機に今後も益々研究活動に意欲的に取り組もうと決意した次第です。受賞式の前後もプログラミングに励んでおり、生涯現役プログラマーを貫くのが私の目標です。

小宮 一三氏



### ご挨拶要旨

このたび名誉あるアレキサンダー・ベイン賞を賜り、大変光栄に存じます。受賞理由として「画像入力技術の先駆的研究と学会運営活動への献身的貢献」とのご評価をいただき、私なりに長年頑張ってきた研究成果と学会活動を認めていただき本当に感激しております。まず、画像入力技術の業績に関しましては、電電公社（現 NTT）通信研究所において昭和 50 年頃から取り組んだファクシミリの小型化のための密着型イメージの研究開発があります。当時のファクシミリは読み取り系に CCD イメージセンサとレンズ光学系を組み合わせたものが用いられており、光路長が長くなり装置の小型化が不可能でした。密着型は原稿幅と同じ大きさのセンサによりレンズ光学系を不要とするもので、当時世界でも実用化されたものではありませんでした。研究は薄膜センサ材料・回路から装置化に至るまで試行錯誤の連続でしたが、多くの方々の協力を得て実用化に成功しました。この経験のもと、映像情報メディア学会と画像電子学会の合同で次世代画像入力研究会を立ち上げ、デジタルカメラや高精細映像技術など新分野の発展や若い研究者の育成に貢献できたことをうれしく思っています。

次に、学会関連ですが、昭和 47 年から画像電子学会の会員になりましたので、早や半世紀になろうとしています。一貫して編集委員を務め、編集委員長を平成 7 年から 4 年間拝命しました。論文増加策や査読の迅速化などとともに学会誌の電子化などにも着手しました。平成 20 年には会長を務め、平成 22 年に名誉会員・フェローに選ばれました。まさに私の研究人生は画像電子学会とともにあります。組織を超えた友人も沢山得られ、学会の委員会終了後、深夜まで飲み、そして議論した日々が昨日のこのように思い出されます。今後も本学会の発展に少しでもお役にたてればと存じております。

両受賞者への表彰状・メダル授与



開閉会式の模様



会場全景

